二〇二三年一〇月二〇日

三輪の山へと茜さすうろこ雲　明日香

束の間の入り日に富士の秋惜しむ　澄子

二〇二三年一〇月一九日

破蓮の風に抗ふ力あり　澄子

二〇二三年一〇月一八日

莫蓙のごと新藁散らす刈田かな　せいじ

仏間開け放ちお庭の木犀香　うつぎ

二〇二三年一〇月一七日

片言の孫とおしゃべり縁小春　康子

秋桜の丘を包みて夕日落つ　澄子

二〇二三年一〇月一六日

運転の鼻をくすぐる木犀香　かえる

運動会愛想振り撒きしんがりに　もとこ

放牧の牛の背中に赤とんぼ　智恵子

二〇二三年一〇月一五日

秋夕焼峡の空気の変はる時　うつぎ

身に入むや古りて傾く戦没碑　ぽんこ

小鳥来て影の遊べる石畳　なつき

秋桜スクラムのごと風に揺れ　満天

爽やかや海風抜ける天守閣　千鶴

ペダル踏む木犀の香の路地抜けて　せいじ

二〇二三年一〇月一四日

秋うらら妻の買物外に待たん　せいじ

しで棒の並ぶ沿道秋祭　みきえ

秋蝶を目で追ひながら話聞く　あひる

ビル街は合はせ鏡や秋日落つ　康子

毎日句会みのる選・二〇二三年一〇月二二日